

■解説

島田叡氏は、行政官として本当に尊敬すべき、本物の人物じゃないかと思います。

—故・大田昌秀 元沖縄県知事

アジア太平洋戦争末期。すでに日本軍の敗色濃厚だった1945年1月31日、一人の男が沖縄の地を踏んだ。戦中最後の沖縄県知事・島田叡(しまだ・あきら)である。前年の10月10日、米軍による大空襲によって那覇は壊滅的な打撃を受け、行政は麻痺状態に陥っていた。そんな中、内務省は新たな沖縄県知事として大阪府の内政部長、島田叡に白羽の矢を立てた。辞令を受けた島田は、家族を大阪に残し、ひとり那覇の飛行場に降り立ったのである。

知事就任と同時に、島田は大規模な疎開促進、食料不足解消のため自ら台湾に飛び、大量のコメを確保するなど、さまざまな施策を断行。米軍が沖縄本島に上陸した後は、壕(自然洞窟)を移動しながら行政を続けた。だが、戦況の悪化に伴い、大勢の県民が戦闘に巻き込まれ、日々命を落としていく。また、島田自身も理不尽極まりない軍部からの要求と、行政官としての住民第一主義という信念の板挟みになって苦渋の選択を迫られる一。

戦時下の教育により、捕虜になるよりも自決や玉砕こそが美德とされた時代、島田はしかしそれに反し、周りの人々に何としても「生きる」と言い続けていた。その考え方はどのように育まれてきたのか？

『生きる 島田叡—戦中最後の沖縄県知事』は、沖縄戦を生き延びた住民、軍や県の関係者、その遺族らへの取材を通じ、これまで多くを語られることのなかった島田叡という人物の生涯と、語り継ぐべき沖縄戦の全貌に迫った長編ドキュメンタリー。『米軍(アメリカ)が最も恐れた男 その名は、カメジロー』2部作で沖縄戦後史に切り込んだ佐古忠彦監督が、牛島満・第32軍司令官から島田にあてた手紙の内容など、新たに発掘された資料も交え、沖縄の知られざる戦中史に迫った野心作だ。

語りは、山根基世、津嘉山正種、そして佐々木蔵之介が島田叡の語りを担当。小椋佳の主題歌『生きる』はオリジナルで作られ、自身のラストアルバム「もういいかい」にも収められている。

権力者への忖度、資料の改竄や隠蔽が常態化し、政治不信が蔓延する21世紀・令和の時代に生きる私たち日本人の眼に、後に「官僚の鑑」、「本当に民主的な人」と讃えられた島田叡という人物の生き方はどのように映るだろうか。



■監督からのメッセージ

「沖縄の人々の気持ちから全く消せないものに沖縄戦の体験がある」

亡くなった元沖縄県知事・大田昌秀さんの言葉である。戦後も 27 年に及ぶアメリカの軍事占領を余儀なくされ、日本復帰から間もなく半世紀になろうとするが、いまなお沖縄が歩く苦難の道。その原点こそが、大田さんの言う沖縄戦である。

『生きる 島田勲－戦中最後の沖縄県知事』は、その沖縄戦直前、そこが米軍上陸必至の死地であることを悟って県知事として敢然と赴任、60 万県民の命を委ねられた一人の内務官僚の物語だ。その映像も音声も存在しない中で、語りと数々の証言によって人物を浮き彫りにする、いわば挑みの作品である。

島田は、官尊民卑の時代に、正面から沖縄の人々に向き合ったという。沖縄戦終焉の地・摩文仁の丘にある慰霊塔「島守の塔」には、島田勲の名が刻まれている。ある先輩記者は、警察を含む当時の内政の中枢をつかさどっていた内務省の官僚が、個人名まで記され沖縄で慰霊の対象となっているのを初めて目にし、大きな興味と違和感を覚えたと言った。

私も同様の疑問を抱いていた。これほどまでに、当時の沖縄で語り継がれる本土の人間とは、いったいどういう人物なのか……。だが、一方で、軍とともに戦争を遂行したとして官のトップの立場にいた島田の責任を強く問う、批判は厳然とある。軍に協力した人物を美化してはならないという声もある。確かに、戦時の県知事として果たした役割に関し、負うべき責めがあることは否定しない。だからこそ、島田の功罪、また人間としての苦悩、揺れる心も含めて表現することで、人間・島田勲が生きた姿を描きたいと思った。美化ではなく、現代とはかけ離れた時代背景、価値観の中で、「個」として島田が何をなしたか、そこにこそ着目すべきではないかと考えるのである。

原点・沖縄戦を伝えるドキュメンタリーは、住民はじめ様々な視点で語られてきたが、今回、あえて官僚の側から描いたのは、時代を問わず、国やリーダーのありようを繰り返し問うべきだと考えるからである。その判断が誤っていたとき、また、それを改める機会を逃したとき、最もその影響を受け危険にさらされるのは国民である。新型コロナウイルスの感染拡大という思いもよらぬ事態に見舞われた 2020 年、リーダーたちの決断一つで、私たちはいかようにもどこにでも連れて行かれることを改めて意識したとき、果たして、私たちは、どれだけ歴史の教訓を学んできたといえるか。

76 年前の出来事は決して昔話ではなく、すべて「いま」に問いかけているような気がしてならないのだ。

戦場に残された「生きる」の言葉に見る島田の絶望と希望。そして、島田を取り巻いた人々やその家族、あの地獄を生き抜いた人々の証言などから、戦争とは何か、沖縄戦とは一体何だったのか、かつて私たちの国がどんな姿をしていたのか、多くのものが見えてくる。もちろん、これも一つの視点に過ぎない。だが、歴史は、そのまま今の私たちがいかにあるべきかを教えてくれている。

佐古忠彦